

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟選

西村 和子選

井上 康明選

片山由美子選

雲梯に望む朝空広島島

鎌倉市 小川 求

△評▽うんてい越しに朝の空を見上げる構図がよい。やがて子どもたちが来て遊ぶ。そう思える平和がありがたい。

タクシーに乗り込む四人秋暑し

下野市 石井 光

△評▽4人で乗れば狭苦しく暑苦しい。マジシャン仲間の4人だと想像できるのがほほえましい。死に蟬の仰向く空や蟬の飛ぶ

竹婦人私の妻となりけり

筑西市 大久保朝一

洗濯機あへぐ一日や梅雨晴間

安中市 大澤信太郎

瑠璃色の尾を見たのみ蜃蜃消ゆ

東海市 斎藤 浩美

炎天や一羽も来ないトタン屋根

小林市 黒木 暢

真黙なる南部風鈴風を待つ

松江市 森 美奈子

屋根より昇めて二合の米を研ぐ

広島市 村越 緑

インク吸ふ万年筆や秋近し

仙台市 引地 恵一

ビール乾しすぐに厨に戻る妻

大阪市 吉田 昌之

△評▽晩ごはんの支度途中の妻の行動を描いて、飲みっぷりのよさや働き者の手際よさを想像させる。季語が大いに語る句。

巖叩き真砂を叩き石叩き

川越市 大野宥之介

△評▽脚韻のふたつ目までは動詞、最後は名詞の季語。リズムカナルな言葉遊びが効果的。芭蕉葉を打つ風の首雨の音

あかどきの涼風窓に推敲す

新居浜市 今井 忍

かけ声も揃ひて弾む踊かな

狭山市 小俣 敦美

初秋の水の気負へる井堰かな

津市 渡邊 健治

幼子のすくと寝入る夜の秋

東京 徳原 伸吉

湖畔にて郷土中孚夏期講座

甲府市 山田 敦子

松明のつぎいよいよ大文字

伊勢市 古野 政木

朝顔の鉢其処彼処古長屋

大阪市 浜崎美智代

北辺の写真家二代鱧雲

相模原市 小山 鞆子

△評▽北の果て、北海道の人と自然をう代にわたって撮影した写真家がいるのだろう。いわし雲を仰ぎ、その生涯に思いをはせる。台風や声ちぎれ飛びリポーター

台風や声ちぎれ飛びリポーター

長崎市 鶴田 鴻巳

△評▽テレビニュースの冒頭、風の到来をリポートする記者。風に声を飛ばされながら報告する。自分史に幼き日あり赤とんぼ

浦波の夜涼の音を聴きたり

富士市 後藤 秋臣

雲二つ山に影置く終戦日

唐津市 梶山 守

日燦の手明日の予定をたしかめつ

常陸大宮市 笹沼 實

一点をみつめ鉄砲百合ひらへ

小田原市 林 梢

てのひらをへくすべる蟬を掌に包む

福岡市 三十田 燦

たたいても裏返しても南瓜かな

つくば市 有阪 貴男

一面の焰となりて曼珠沙華

東久留米市 矢作 輝

中断の会議再開秋扇

東京 渡邊 顯

△評▽中断前の状態にすぐには戻れず、黙って扇子を使いたしたところか。夏とは違つ「秋扇」という季語が雰囲気伝えて巧み。いくたびも教へ子に遭ふ夜店かな

柳井市 植野 史理

△評▽何人もの教え子とぼったり。夜店という場面にほのぼのとしたものが感じられる。拾っては捨てて人待つ木の実かな

持ち上げて開ける引戸やつくつくし

大阪 岸澤 由美

夕刊を取りに門まで秋涼し

西宮市 上田 佳子

家々の窓の明るき無月かな

相模原市 はやし 央

朝粥に梅干ひとつ涼新た

尼崎市 森下久美子

遮断機のいまだ上がらぬ秋暑し

光市 岩崎 滋

梯子立てかけられ柿はそのままだ

甲府市 村田 一広

夏帽子顔半分のかくれけり

さいたま市 根岸 青子

<歌集>

新刊

<句集>

◇仲寒蟬『全山落葉』第3句集。政治からごく身近な話題まで幅広い句材を網羅する著者。本書では自然詠にも新たな境地を開いたように思えて頼もしい。△国家からすこし離れて葱坊主(ねぎぼうず)△わが去りし席が消滅され西日△日本に醬油ありけり冷奴(ひやっこ)△(ふるんす堂・30080日)

◇江崎紀和子『花の幹』第3句集。△一番亥(い)の子の足音がかけてくる△の愛媛ならではの風土性に加え、各地での吟行の収穫が生きる一冊。△通路装束一人つつ違ふ白△かりがねや蒸留塔に火の匂△(本阿弥書店・2970日)

◇春田のりこ『神遊』第1句集。田中裕明系らしい抑制されつつも華やかな作品が並ぶ。△鴨の背を雨滴転がる遅日かな△の写生の目△鼓なめ笛はあなたため神遊かみあそび△△寒施行(かんせきよう)静かに声をかけながら△などの美のある描写が印象的。(ふるんす堂・30080日) (俳人・榎未知子)

◇坂井修『一筆中腰腰(いちぶちゅうよう)』情報理工学者でもある著者の第12歌集。きわめて多忙な日々なかでうまれてくる喜怒哀楽を巧みにとらえて表現する。それぞれの歌に言葉の力を感じさせる。△AIは短歌作るか?一三〇年間はれつつけぬ今日はZoomで△(本阿弥書店・2970日)

(歌人・中川和子)